



玩球人来てはたてのふ

和田ずこの志よりいつか日北本乃

云よりきりく作く子

本著書と東とやうく

いさきき書れ朝はけり

朝鮮人肥前去松浦と戦死を待ては留め

返りて此のきりくと松浦と

いく取うはての教やつと



瀬潜師走囊袋起之意趣



性首本海王代盛ありし時後撰集を編し其申

瀬潜神の歌とて入らぬ如歌日ありていさの好まぬ

風義なるし不中江の風北任人志那孫三郎宗艦と

い商人難髪しと山傍子任し名を宗艦と号しけり

是歌の意白ちとの内理亮あつて連歌小娘を授出

能借大筑波を二集出きり是を瀬潜の権輿成り其以

伊勢山回の神官志本田守武徳此の瀬潜子句を傳

りし是又瀬潜連歌の始を以ては連歌百韻の式あれ

とも詠詩の定めは法もなかりしを永貞徳連歌の  
式をよはむかゝる詠詩の式を定む御筆七巻を著し  
世に口立甫にたふひ草を化すく世道の法式志く世を  
今の世よむ内之風雅の道よきものいそはしむは  
事ある一物もとも上古の詠詩ハ優艶壯麗なり  
かりかりすし実情を述べするにたかりしに貞享天和の  
以芭蕉老人在都出く附句ハ心附とよむをみ一葉白ハ  
骨折なきまひく実情を宗とすり時世を憂回し是非  
評定の一く起るといへと終句ハ霜う正風折ハ碎かれて下  
け風義に流し事ハなかりぬ今代の人ハ霜う余流を汲ハ

いふもいふもみり句意ハ空をたふ啼養のこく枯木  
粧のあまは姿なれい計りよ人穢といつてみり句意を  
急おしし一冊の門ふこころ人のあらんとて管見ハ能測を  
顧一くみり句中ハ世人の通曉一かたはちのま取て是ハ  
法をたふ事ハ一ツもま解の南まら河ハ我幸是ハ  
志ハ一漂題師在妻と号ハ一候霜う句也

みり句の意をたふりり年の書

お二十一日

西戎の閑人 述之

湖水眺望

竹書を近江の人と惜まふ所 芭蕉

いひあふりたれとも願は湖水眺望とあれは武彦達を  
出で聖徳の書は州山ありてあり心まよひの跡まてち  
東都にありて書をもむむしの人と俱に惜しう今年八は  
そはま省てを深の今俱に書をも惜むとの作也け句而系  
切事いふ 大概は大きき一ちと一なる格のやうなる古句中に  
惜しむるふあつた極奇人のく境のちとほを略し

兼 夜に伏見の柳ちをりまよふ

是西岸守の院も中尉一への自也而伏見の山名物も  
桃のや下とありといふと有難き教化一之衣の袖をも滑り  
竹の洞れ麦に慰まやどり部

是甲斐の玉山家ゆくの自也甲斐のむらり牧り物  
多し所謂甲斐の志弱なりと云竹は是之のうらり物  
是よりいふ人も時方なれは春秋に立止所之書の書り也

兼 人かあつた物も何れ 幸の書

是の道世の後れ句とあり昔は昔にありて成家とあり  
日候しつらふり人かあひし事の有はるは今世に人  
なりてふは書り物も何れは是れも世を控へるあり

かきつゝの書情をいふ

陽はさかやけの海にわたり

けいおのふくしつかりのふとんなくたきいせのほれさきまのふく  
柳をとりしつたまの入りまて考へ一歩のれきをいふ  
ちうまれのうたじつかりのてくぬけ隠るゝの化を師直筆

道の邊に木槿を馬中宿美々

けいおの木槿を船か舟とわりて午時の自りまをいふ  
くろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
の化を妙え姓句面白深意影りいふまの芳山  
岐山集といけいを載る路多の木槿はるまゝくくくくくくくく  
けいおの非も一向せ早の難えと談ねるも備中芭蕉の

上戯王ノを添く悟さゆえ

白くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

けいおの題に梅林とありけいおの梅の白く笑ふ  
ありけいおを好む林和靖と号なりけいおを  
有るが若きものうきけいおのあはれまはけいおを  
登るゆゑと誑けいおの白く

山路まて何やうのしすもれ草

けいおのちいさる道山路強き有けいおやう  
定るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
かきつゝの書情をいふ

「平橋の松の影うり勝せく

けりま橋の松の影うりのつひにさてもまほしき花の影うり  
勝せ成りと花の影うり花の影うり花切家の問答中  
あり味あり

「今二ツ中子活し花梅の形

此類古年を捨て故人子遂とあり花を活し  
花を生し花の影うり我とそ方と今二ツ中子風雅を  
矢いさし中子生し花梅の影うり

「母多く花の影うり潤のな

けりま花の影うり花梅の影うり

我の影うり花の影うり花梅の影うり

「花の影うり花梅の影うり

けりま花の影うり花梅の影うり  
けりま花の影うり花梅の影うり  
けりま花の影うり花梅の影うり

「元日子田毎の目こも影うり

是を花の影うり花梅の影うり  
目こも影うり花梅の影うり  
面白くは花の影うり花梅の影うり

面毎の目立ちく面白き人との化意

誰やらうり姿に似せしけさの事

是又思姓の後業ありきるは思姓ありしめは思姓の事  
何より思姓を誰やらうり姿に似せしけさの事  
或人の思姓の事一思姓の事思姓の事思姓の事  
や思姓の事思姓の事思姓の事

大津絵の事思姓の事思姓の事

けり思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
我思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
佛思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事

思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事  
思姓の事思姓の事思姓の事思姓の事

いよやうにありし梅は枝は是ホのまじりし梅と云ふは白く

梅 香は此の日の出は山路引

是山中の吟は物まじり梅の枝は物まじり梅の出るまじり  
梅香の白く梅言は物まじり

暖は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅  
梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅

梅は梅の真物ゆへに北の梅



との白く子竟るの聲を強くさする白く

初ーくれ猿も小養をなけり

此句懐養子のせく伊賀越流りの以ありーとら  
時物のくれ猿れむさりて空をある神小養をほり  
あしこま時の何れは海心ひやしきく一句の詩言とけ合  
神階の魂ありとらと先車車の一つもあはひあり

あしこまと目おはまはまぢくも秋の風

是秋のーれ書あく西山も菊さほをつらるーとら  
おとららるー白子秋月のあふ入ーはさぬをひやらー

金と席の木のぬららよあふら

けり冬を務りてをいんとうを席の木の古さるをけ  
けり此口扉風川也川也神を務りのあ合想像は  
あ老々五論也も空屏の冬を給子さるけり  
神もさるーあはははあははは屏の老鶴といふ十景あ  
度ああ難ーきあ神もけりけりくさあかーい

堀網の歯くはも密ーああ柳

けり白の柳とーて吾密き神をいんとう堀網の歯  
くはとんはさるー十論也此白をのせくは羽ら骨は  
すんで此白の白と神をけり

西つ五器の梅りぬあは心の神

類上野の如く其の如くしてと有例の幕打等の子  
らうも其の如く何れも其の如くして其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

月夜の花やまのあつた

是の二聖人の圖に據りて月夜の花とて其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

船の子は白鳥かき別れを計

は白留別と題より我は白鳥のこゝろ甚深り其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

古池や陸花さす水乃音

は白鳥のこゝろ其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

白鳥や其の如く其の如く其の如く

は白鳥のこゝろ其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

白桑うら水花目に思はれしは法の網をま  
まうと観子の心をよく形容する白と

何のよれをよとては白ひ針

是は作勢はあのみはありは何事の初りかたは  
あつねとあつねとあつねと今も彼非明の感  
こそといふ事ハなちれは非感よのつねたるを  
何の危ともあつねと自ひの事ハ自ひは増あると

あつねとあつねとあつねと

是は座右の絶れ白みく人の短きととく事なれ  
已らき短きと事なれととく事あり白と心を

形容くとも事あり一かえり

三井もの山きくたやりの月

是鳥はかた地中の樹傍の枝く月下は門といふ  
句の心をとりて妙月徒みくも急ら三井もの  
門もあきくく事もの伝や大津めくの白とや

胡蝶もあつて秋の葉密に

け句芭蕉の相を方一代を形容する白とあつて葉  
密に大板胡蝶と化するものなる其れは葉密の  
なる胡蝶も化する事なれ一て秋とあつて  
け秋ありといふ白と生涯風流の為日をみれば

ちたつちの月のはるかしひるの助曹かたも  
たうく一白の能くはるの等々の人せまはるるは甲申す  
むらんやた甲申すたきりん

是真盛の復用を見て追悼の白之集巻義あり  
軍力の壯年と做せて討死と一真盛をも之秋の末  
あつたると起りて上りて甲申とて討死  
悼る言能くはるりては甲申とて討死  
けねひんり

戎傳の賣日禱を五りり

け白戎傳とは是は實迹の擧げたりては皇國喜  
余りゆらけみのねきなりては白とて  
はるるく等々の禱を五りり  
くは福人の命ありは白とては甲申とて  
若きりゆの二真とては甲申とて

葛城の竹田の本の風分

け白軍人の夢舎を説くと題を閑人の所子  
はあやといふは絶妙は題なり

馬場のたのむはあきの目式

旅人も見ると思ふありけりては甲申とては甲申とて  
たのむの目式を説くとては甲申とては甲申とて

旅人のふるも草より折じし花をかくとひ出されて眺る  
旅心深し

「春のふゆも花もたは山の物哉」

春のふゆも花もたは山の物哉  
よはるききと類たはたきしきけきもあつと  
しんしんしん

「櫻のふれ花より、かきしめあつうか」

是の櫻我がの性質の淳朴を状しての句と云ふ  
そ實の正直なりし世に宿便し候はぬは花の香の  
時めくもあつうきしんしんしん

「菊の富子花見鳥なる雀哉」

此句題も似しと有我がを雀のちんちん  
乙地のらしし一箇の葉細同士の鳥を雀と  
界と心を無しして雀を雀と云ふは  
子地と云ふは雀と我がの雀を雀と云ふは  
雀と心を無しして雀を雀と云ふは

「下りぬまきや後れしは梅」

此句後の若し梅の句と云ふは  
見ぬ人もなむは子貴後れしは梅の花など  
きかへあれと却て其の後の面は  
梅にえり人もなむは子貴後れしは梅の花など

「遠草」の白之伊勢の初夜

是歳且の白之伊勢の初夜は幸とされ元日ある  
すむ成りし幸遠草も有伊勢海を伊勢の  
糸乃 集りたりよはるもと元日伊勢の初夜  
ふれかひ合ふ

「梅香」の一首を長かり

是一圓忘退博の白之梅香を詠しるは  
くものやうせひはたしそくふくちりて昔と  
一葉を詠されしは梅香も人々知れりしは昔  
を詠るるは梅香と詠くは梅香の白と

「か」の白之伊勢の初夜

是柳の枝れつうく枝葉のまはり  
白の心細き枝の本れつうく枝葉のまはり  
彼春の始皇れ雨着りて古事と不出し  
下りまきもたぬは流るる金のとくゆき  
「八九」の白之伊勢の初夜

けりし柳の葉れ風は靡きしは  
空より雨のやうくゆきとのえは  
「雪」の白之伊勢の初夜

けりし雪の白く雪は積るるは  
雪の白く雪は積るるは雪の白く

例も又雛子の啼あり是は春夜の桐の白き啼  
かゝる鳥の啼也

〔春の由や一雉の巢作りを福の編〕

是雛子の啼より所を以て白也其鳥の白く横は  
まかしくなり漏れぬ此雉の巢を造りて居るも  
け此れ巢と入るもてけ雉の啼くも怪しき也  
神自然と取らぬなり奇女の他意也  
白鳥其鳥の  
雉の巢と得る

〔春の柳の泥を以てけけけけ〕

是は白く言の白くけけけ柳の木の柳の白く泥を以てけけけ紅顔  
純麗の美人はけけけけ海を以て泥の中はけけけけ

彼女を楊柳とけけけけけ常女を楊柳と泥を以てけけけ

〔春の川も怪かり世や雛の家〕

是河川の雛を以てけけけけの白く我れけけけけけけあり  
けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
歎する鳥の啼けけけけけけけけけけけけけけけけけ

〔南飯より春の塚に萱草〕

是追悼の白く故事を以てけけけけけけの白くむけけ  
けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
當に飯を以てけけけけけけけけけけけけけけけけけ

墳吐草多の嘆いあか入るたふらふは是の草を  
あかふらふのさへいり

墳のあかふらの目録中目録

是中中の目録中墳の飛揚とあかふらふて我を  
りあかふらの挨拶と我山野中目録にて胡蝶の余を  
若くむらふの生涯なるふ草の情あめてたを  
あかふらの目録中墳のあかふらふとあかふらふ挨拶と

起ふ〜我友とあかふらふ胡蝶

けりし莊周の夢と胡蝶とあかふらふ〜故事をあかふらふ  
生涯の終りあかふらふとあかふらふ〜我友とあかふらふといふ

起ふ〜に飛んであかふらふを起すけりあかふらふは我を  
旅りあかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと

三 眠止あかふらふとあかふらふ 鹿の角

あかふらふ〜故人あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと

あかふらふの情あかふらふとあかふらふ

あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと  
あかふらふ〜あかふらふとあかふらふとあかふらふとあかふらふと



得て勅具一高を一天に施さるる者を生かす事  
多しと云ふ信濃の書に云れり其書の事と云ふ

「雀子と雀啼かり月嵐北窓」

是は近き事熟識なるもの神谷の白と云ふなり其  
雀子おれ其類して花柳や所自在をば下し我は嵐也  
其啼を今の大概回しこれ其終由氣めて終はしと

「六比枝や」を引摺り一巻

け白山丹波の如きと云ふ南意神物也一を引摺りハ  
彼一休和尚丹波山北僧云何と云ふと云ふて續々其書を  
してあつて云ふれり丹波一山上より坂中迄紙を續

大書も括て走りに引下りて下りて是あさきの行書  
一の字も長くも去てよめおたは是よりなりなり  
かされ一筆一休抄控にありり云ふるあれは丹波谷  
一を引摺りとの他も

「雀子と雀啼かり月嵐北窓」

是は山形高僧の回縁の事と云ふ我は丹波谷に  
ありありと云ふなりと云ふ一は其の杜ありは  
ふりけおめをうらん云ふ一は其の智徳也  
後れり白雲に掛つてんと杜ありを云ふ白雲  
人の目を時え道遠院及び初て宗徳を云ふは

杜若の葉のりやして空盤を池の指とつらむ容の瘦妻へ  
そらるるを伴ひ具しや空盤ら葉とらんれが<sup>鐵</sup>知つたことと証  
空盤の指とつた葉あつたはりキ可はとて言へんとすれと  
葉の池あつたはりや鐵者ようく付やとる白く是れ此祝  
も感へく空盤を杜若の葉とつらむ葉あつた杜若とや  
あつたはりや

〔朝〕ら正月、梅の枝をとり

是時よりをとりやうと今も遠くを煮て汝何れや  
葉あつたはりや梅の枝をとりや梅の枝をとりや梅の枝をとりや  
梅の枝をとりや梅の枝をとりや梅の枝をとりや梅の枝をとりや

やとらめく煮へる白く

〔朝〕あつて我はつたやう坊の妻

芳盤の葉或坊の葉を借ると有白の心は我も世を  
いふ少解たれは心の人よかりきるし何れも解めあ  
るはつたはりや一葉もあつたはりや一葉もあつたはりや  
やとらめく煮へる白く

〔朝〕牡丹千馬よあつたはりや

け白葉を甲寅あつたはりや一葉の心は我も世を  
たつたはりや一葉の心は我も世を  
あつたはりや一葉の心は我も世を

との白く白のはまき人母ありて巧也

志せしあはく枯て餅賞やうり引

鞆の社破壞一なるふま詣一てれ白く蓬をれり  
あゝの大概甚しむあは生れる物たるにそれとあ  
あは枯果くやとあまふまし所跡りの乳を助  
く厚きこゑは餅賞遊立やすしひらとああのおま  
らり神思ひやう一白のはまきあへ

是凡雜の席母ありて見の座あは七三席

優艶子なるは一との白く改ひ一あ七三席あは七三  
是凡雜の席母ありて見の座あは七三席  
は凡雜の席母ありて見の座あは七三席

いふ所一に武士うれき目苑の席母ありて威儀堂く  
一ては風雜ありて身帯れ七三席ありて  
てあはる甲斐のあはれとて白意深重と

はまきやうる啼きあは目八洞

是まきと情む白く島啼ハ彼詩母月落鳥啼れ  
物あはる半之笑の目とあはすうら目もあは  
情むとあはるをゆきあはるを觀し九海を  
信はるの白く憐深

あはるを摸する引むけよ時身

是那須野のあはるの白くはまきを摸する引むけ



竹の子や 雑たけの産すはひ

け句泊形集あい移りて捨のよまひとあり炭俵集  
あらすはひと有句のやい源氏あぢの巻子集の上  
雑たけの雑作りのあふも捨たあふも源氏の巻と  
つらういといふなる縮ませがけはあふと何をも  
中とくまきく雑たけの捨のよまひみれた竹  
け子のまきもといふとあふく成人あふといふ  
おののまきあふく雑たけ及び穢  
是も捨を隔る人の方の換投之も方今  
まきあふのまきあふく穢れらるる雑たけ  
雑たけ

時句く余は自らちぢるるは夏迄のまきあ  
雑を隔る及び穢ともなり雑たけは人伝交  
なるのまきあふく

あふのまきあふく雑たけ

け白くは道はたけのまきあふのまきあふのまきあ  
まきあふく雑たけのまきあふのまきあふのまきあ  
雑たけのまきあふのまきあふのまきあふのまきあ  
雑たけのまきあふのまきあふのまきあふのまきあ  
雑たけのまきあふのまきあふのまきあふのまきあ

あふのまきあふく雑たけ

あふのまきあふく雑たけ

あつきの或はうもくの癡う能をもを者下は後逃ぐ  
尊も一母の白とんこり巳う火おたるとて雲のあが  
おもしく光を影しと心をも顔の別をを宿たて  
風蕙は羽織を襟も結りけ

けう丈山の像れ襟と有るもの徳を風蕙高下  
志うも威儀容態しあつてぬを羽織に襟をもさ  
せ結る白とんこり

あつきの或はうもくの癡う能をもを者下は後逃ぐ  
落柿舎と顔のり草は神の白え首の色緋あつた  
あつきの或はうもくの癡う能をもを者下は後逃ぐ

あつきの或はうもくの癡う能をもを者下は後逃ぐ

我も似も二つあつて一ま業氏

門人の鏡もせり心と有る業氏二つあつて一ま業  
さあつてこれ我とま方あり似も一とあり一ま業  
歎すもの白と

物も似も二つあつて一ま業氏

けうの白とんこり白とんこり白とんこり白とんこり  
白とんこり白とんこり白とんこり白とんこり  
白とんこり白とんこり白とんこり白とんこり

あつきの或はうもくの癡う能をもを者下は後逃ぐ

是人其たとして凡猶も有てき四止も考に換扱え  
此に危の以別實も一交其責脱ののうれハ為實  
お兼り人の換扱え

柳舟柳行舟の強しき葉似

是流りの初出立舟柳より一りりしを所初き葉白  
あみしは流しとの句と出まの時此句とていなり

目の道や夢かこく女目

夢ハ日向夢とて一名ハ目車とよむ日廿連て夢の  
舟月舟の以たれハ日の何時とていれハ日の何とてい  
夢かこく女目

舟目舟と集く子一宿上川

け集て舟一とて一住言之水増りて川の漲り  
流る一船ハとて舟目とてい

舟目舟と集く子一宿上川

け舟とて舟一とて一住言之水増りて川の漲り  
流る一船ハとて舟目とてい

舟目舟と集く子一宿上川

け舟とて舟一とて一住言之水増りて川の漲り  
流る一船ハとて舟目とてい

なうめも百廿かられて足さき日に唯水田の搦斗にかゝる  
ふちく融りぬふちも也搦の眺を羨し海白と

〔五〕か月斗平搦流むと羨あり

け白い雲か平を面白し連流り今も其時斗斗  
搦て若しその余りけきく平の中よりて流むもの  
有り世のまぢる後を歎くま之と羨む白と

〔六〕糺結片く斗斗と羨あり

け白く眼を流しこの白と羨あり糺結かく斗斗の  
羨をたさきて羨しと羨糺結とそれを流し言  
なれは片く斗斗と羨あり

〔七〕あや先草ぬも結りん草鞋の結

是流りの白く斗斗と羨あり草鞋の結  
結りもむもと羨し

〔八〕田一枚植く立さ所柳のな

けりもし女を羨し白く斗斗と羨あり  
田一枚を植て喜まされと羨し

〔九〕風流のけりんや奥の田植の

真名白川の雲を越すと有鄙の果るれを羨めや  
一紀事もさき一紀事昔め記し何回かを視て是也  
凡流の始るんと也或人の曰白川の雲を越て初と



真州へおちたれハ身はれ風流の娘は因縁をば  
まじとていづれ好む方よ随ふ

蓮のきよ目を通りも西は鼻

けり能き又丹野う方すの白え丹野ハ紅梅共堪能  
かる上風雅の道すも志有て甚の香も目を通りせり  
と也西の鼻とん来り西けりも能なる也

心とて明るも解やわす

是の上も同時の地え雲の是れ所をわくと解  
明るもの尺さくも人かすりての地えは是等好し

川風は能かたえくも夕涼

此条川も涼の白え川凡の涼もを能かきとる  
くと幾れ白えくすもまへ何の色もわくはては  
アししるもおま梅もぬれもく

あつとてお少く浦へけて夕涼

けり暑も涼もるれハお終りなりふく浦もまも  
涼もぬれもくもいふと炎熱の只お像も

家涼の物也西施の合歡の花

も涼の花も合歡の花を涼も自之西施を入り  
彼去家の揚も把も眠海棠もくも眠もるれハ  
取てぬれもくも西施も眠もくもくも

源一ももはるまゝ家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

源一ももはるまゝ家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

源一ももはるまゝ家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

源一ももはるまゝ家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

源一ももはるまゝ家引り堀越也并

けり源一ももはるまゝ家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并  
家引り堀越也并

入してをあたふた益をさるゝとての心もあつて

月をらんく物きくはるはたのそ

題須磨と何れ縁のうさ何事とせむはふらふ  
あはれ月の子らを見ては月と人違ふと欠く有  
るよと説いては申す事等の事と考へ  
してたゞぬをねむらふらふ

松子よかゝ所洞や楠のそ

正成の像も隣之言也彼楠の討死を人進も子正行を楠  
井の宿より海へ後來れ教訓をささぐらへ後肝心  
ありと石と化する楠のそ語もく有ると是形容甚奇之

面をわてやう悲しき橋舟哉

けり橋舟の徳れ何し遠きく矣をさむ付に羅も  
報ひも海の世も忘れ果て面白やといふとみい  
橋舟と何れ毎年の海へ聞こえ悲しけれと云二面  
何れ取一句をばきなり面白てやう悲しき能自れ  
はりの合と

ふ頼ひなかくの川に鮎鱈

けりせよ頼ひなかくの川に鮎鱈  
白し白のふ下みぬる白はと

清勝や岐子教也まら松葉

江の尾流のしほみちをいそいでゆく  
わのしほをいそいでゆく  
しほをいそいでゆく

舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく  
舟をいそいでゆく

舟をいそいでゆく

さうのおちたれい合歡のまれを羨むもなかりと  
聊くまじもぬまゝを合歡のまらふをいり

葦の海や佐波子接ふ天の河

是七夕且おをさうしる句と其豊満より佐波の世  
み南やそしあれ七夕のおれ明かみる佐波のかん接  
きりし一句の仕立巧なり

新く印や益瀬おちる門の垣

けり題は閑閑とあり句の心は益の瀬おちる門の  
垣なるれ新く印の接ふりとは是隠者の門にけり  
のゆるゆるの垣はかたむ能た人か

西東あくれさ同く秋の風

けり言は事千子う方区おあまらりととむ句意かたは  
いはゆるひもまゝい文科の那部

姨控の月をいんてはく穂——ていさうひとま  
まきしめ言かられり

既<sup>イカヨイ</sup>早<sup>イ</sup>や海老煮印との書付圖

是は總志に南海中におあり日書て羊れ晴を羨  
てやううの熱すれに別目をこころしむをとりては  
の月がすのし海を羨はとの青園にと羊の晴を  
海老煮かつこの他え

月夜や膝子もさき青地着

是初會真りの見事なと月やこゝろで膝子  
もさきも早下——の挨拶こ

情惚やあけな——草の上

けむり肺の耐着を求むと白とんぼの海舟  
舟も心んこ

桐のよゆ鶉啼ちりし堀の由

けむりありて世も庸とれは家<sup>マキリヤウ</sup>とあさひく言  
くこの挨拶之桐のよゆ風舟は桐とさよふに  
肉も骨も鶉啼んと云ふこり是夕とれの中を  
此秋凡

舟も入て鶉啼之海舟は星をなとて今ハ堀の由は  
啼こと他え

琴のよゆや古物店北脊戸の兼

琴のよゆれを琴のよゆおれもゆうに物之を  
店の脊戸も兼と云ふこり真かこ

酒のよゆや目もくしれ——兼の酒

けむり月夜はさき酒の佳もあれこゝろ酒より人  
目も酒も兼もあれこゝろ酒より人  
よゆも菊の酒とて貫ひこゝろ生涯の何れも兼  
兼も酒も兼も

「子く笑テ九月も色一葉此花

題古柳亭と有是女年廿五道中未熟方々若二換校

「校少りの目少く」から其甚苦哉

画樓と有り定て傾城を治席なるもの浮世繪其様は  
芙蓉の白ハ一ツをれを校少りの毎日く老るよと日毎  
かり所あるのきりれ女と云ふ句趣なるべし

「枯とも女吹る」世から世

け自れ分のち〜一〜女を云人進枯とも動ふ我  
斗け世から女吹る〜女あり〜一〜も極き枯も僕も  
吹れ〜とも也け枯とも〜所〜世分世餘世像す〜

「枯枝子」物のとまゆりも秋の音

是等秋の寂〜も神を誦ん進枯枝子物の流り  
や〜と〜一〜聲〜喟〜を時〜の神〜せ〜く〜か〜も〜わ〜り〜け〜神〜を〜人  
て世人の他子及ふ女ありは芭蕉の句は是出きて老と

「道中」や行人なり〜も秋のく見

け自り秋の寂〜も〜建て柳借の道中も推ち向人  
ち〜把〜を〜歎〜す〜も〜句〜と〜ん〜ら〜り〜

「松風の軒」をめぐり〜も秋の音

大坂清水茶屋中〜ち〜あり〜と有は松風の室の松風も  
有ま〜一〜茶屋とあり〜の〜茶〜の〜た〜ま〜ら〜き〜れ〜松〜風〜の〜こ〜き〜

常一恒物をゆくりとせりて生涯榮をみりて  
秋を種よりとて

「庭掃て出るも古の散の柳」

け自回りの人とおれりて春を此の時自とらる  
句の心を我は柳の葉にこころちりて別るか  
さあはとるの庭はぬとて春を掃て出まは

「柳、宮なるも世に春の心あり」

け自は大所夢、まはさびりて春果る所を昔ふ  
ちみれりる井、倒して春の心をわらそ  
春の心は世に柳の葉にこころちりて別るか  
さあはとるの庭はぬとて春を掃て出まは

とてふりて春の心ありて

「秋賞てふも春の心ありて」

是世人の恒を世に春を賞て世後正を計る  
智に我と世に連て外に賞たるの月の面を  
秋賞する時の方ありて入りて春の心あり  
なり秋賞するも春の心ありて

「春の心ありて春の心ありて」

下なる春の心ありて春の心ありて



馬方ハ急リト 時西北大井川

け白時毎の物かろしき神ハ馬士なるもの類ハ急  
ま〜と大井川と急て馬士ヲ射〜く西白〜

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ神時物

神時物ノ七ハ一ハ神をあらわ〜ハ心ハ神ハしち  
斗ハ世の人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

時物有思ハ心着をあら 我志をなせ〜

時物有思ハ心着をあら 我志をなせ〜

時物有思ハ心着をあら 我志をなせ〜

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

斗ハ斗ハ人ハ年ハれ〜ハ心ハ神ハしち

勢国の正言の自に延々と云ひて一應の事か  
と云ひし一語をひらき

いざしつと云ふん其時よ

けり申あまをたふしむの自をとも書ん  
勢の事と云ふ相言面ひいふ事か

書の申し免れはち舞つれ

山中より其のむひくとも有るの事か  
心退く可考又或人の曰書物事  
申す事か越後意州白龍舞つれと  
白子之傳らん

冬に終り又ふり候事けり

是れ日比頼山人の挨拶と云ふ  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

先づ梅を心け冬に

暫一強しある人か  
王仁の難陀は其の記を  
梅を心け冬に

難陀は其の記を

是れ其の事か  
梅を心け冬に

おめ海之陸のやうな酒五本

異日蓮上人の西書五部第一卷三本酒の板酒  
み井あまのけき蓮華経と回向法中有酒を飲ふ

〔字を為すや小種ちりゆ白乃孫〕

け白字氣味れ指さひしは神を云ふ小種ちりゆを  
飼の飼りしをたのけしる孫ましくと飼つて倦る  
もの之をこぼすのけしれあひもこぼすは白碑  
こぼすはつたれ在る羽の節骨よみてめりし

〔こぼすのよあひしは本の葉か〕

母を指しかみあひしはあひる母のなまじりし

あひるあひるのよかもしる葉を本の葉かあるよあひる

〔毛おの後指し候し候大種か〕

古知代をせひしこと者むしは世れれし時功有

月ひらぬし今指しれしを葉の時月わりし大種

あひるあひるの指しを指しれて其れ候し候し

是指しを今時めし今よたよて昔をせすの白紙

〔難吹し指し色や軒れを敷か〕

し心ハ指し色行し大結ハ嘈々として急曲のこし

いつ序をわけて倦らぬし新編西の敷の書を指し

とまじりしは是難吹とんぬし其書の序也

あゝ何れもあはれなる御時

是芭蕉翁生涯を花苑を築きと観して一塵此世念  
をも止ぬるぬる之傳也曰は白き花よりぬるくといけと  
りゆ句能けて上又文章至るゆへ路の信使らあせし故  
川かたを依け事を候しあら何ともなる人の詞をばく  
しるを感物とていふこと実を梅の竹任然心は持て  
ぬくけの危知もまた少くもぬれを控け心ゆく天年  
を終るは何事か有まことし事をあら何ともあはれ  
し能は道舟入くぬる心を悟らん  
[葛白く洗ひまじり梅の心なる風]

けりい愛を梅の基しはまじり心は梅の心なる梅の  
根を白く洗ひまじり心は梅の心なる梅の

[昔は梅の西かまじりけり梅]

是は梅の心なる人の核梅の心は梅の心なる梅の  
心なる梅の心なる梅の心なる梅の心なる梅の

[香を梅の梅の梅の梅の梅の梅の]

けり防川首と有風雅を笑ひて主人を尋ね  
まじり梅の梅の梅の梅の梅の梅の

[まじり梅の梅の梅の梅の梅の梅の]

けり大梅の梅の梅の梅の梅の梅の

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

是なる巨魁の心なりとて 衆の心をなすべし 或人任其能  
を炭焼ぬべし 云はば 衆の心をなすべし 或人任其能  
巨魁の心なりとて 衆の心をなすべし 或人任其能

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき  
一 其妙なるものありき一 其妙なるものありき

是をとりて師を其月おのすもすれは狂子治るべき  
子似しりとは無きといふも其を記すをいふも其破客也

芭蕉翁一代の句の泊船集句笈等これ後書ふ所なり  
載といへる夜辰月夕此詠都鄙に散在して人  
勝羨するものありと云はれ然るも其句評平なり  
意味幽微なるはれ尋常に思ひたるより其心を悟  
者あり一南村芭蕉乃門と稱するものも之も其句の自  
らく顔す所なり其も蘆奥を計る者ありし故也

井桂を初は其句の官尺一句中に解が記を採て是の  
注をあり我れ記し一也若し校向希む後れ君子  
翁ら道の正見解を樂む其道の永く世に傳ふ事を  
濱陽は其生をうまひ傳へぬ

附録

思出抄

連歌詠事季の爲白をすりる禁忌此  
事之是を調伏の句より古今の句をいふは是の  
各式有され其古人の事とく今迄の上ふくすも  
あり是ハ其原本ハ其時の道あり止るをゆす  
る之中は大坂にて大園秀吉公此由子秀頼の生れあり  
時安産成就此祈禱不花此本の連歌師を百納り  
百納無り

大般若若くは其女此祈禱の事

一ニハ過くは人の紐とく 昌化

け白他意慈言少く神の感應も有るはいさ

百納満より其君誕生有りされ其は不季は  
不吉の連歌なる也中修りる果して慶長元和の後  
豊氏の社稷滅亡して御成も生害すしくは  
是紹巴矢策之とヤク式人の曰是等々の事全知  
作してなせらるるは皆是天下億兆の人其上を  
とくり理世安民の志あり執りて其れ連歌あり  
其旨趣を極秘の中とれハ口介仕給へ云々  
一の智日向守光秀信長公を我し事らぶる女是石  
山子也連歌の百納あり法橋紹巴とて傳ひる天下  
革命此連歌ありハ惡歌降伏の法をわけての白他

有海起也常小を習ひるく反逆の心中中程一て言ふ  
出されハ紹巴もよの常たると思ひたりとやを時先  
春句下

時を今あえり下知内さし引

一白の仕立ハ面白れ在降伏の法なり一是木の白止  
又月を教養とすれば習ひあり先香を乞ふす  
一て終日之功を金ふす事あり一又大正の比中減田  
信長公武田四郎勝頼を征討一あり時連歌春句小

松風月之けこひた起且引

百韻成物の後印時中折立武田勝を退退け一戦

大由勝利をねめひ終日武田城之れおる是は  
白の句法字法各式もれはして合戦いさる始り  
さるは勝利の崩一終日あり海承平天下此聖道  
なるは小を法ハ暫く暇之

一那借ハ連歌新式の法を換着すり中のたまは  
昔より連歌也云觸るけや知法ハ是をちりて  
仕立一是那借の肝要之中古此系通時の舞も無  
し一季なり一或ハ切字なり一の春句なりと云出るは  
身あり終日ともを道徳一の達人言れハ世人へ云  
況中なるはの事ハ必極一て有事之世世人ハ言て是を



知らずして彼達人の拙意他をすまらぬ心必為一室一  
落入て物のまねれ馬の水呑と起大かたる駒を  
かく事えぬと古人の捨れ丸る法ありともむさとし  
さやうのまぬす物うは是れ一の物ひえ今の世に誰か  
先輩もかく有らなといふ所無法人有り是れ此道の  
事、後身も志しぬ愚昧の能事とて今も芭蕉の白干  
かちりううた杖つも坂を落る外  
是を歩かううたよむ友丹古来より喜う此巻白  
と云ううたせりけり

梶橋ハ杖突坂を落葉外

を落葉の香白を落るうたせりうた又

あすもあを誰侍橋をけり

けり物々とうてきやうとせり是も

麻ふ掉しれまの橋共片心へ

白の心ハ麻の竿母かまを是に誰を侍侍希  
そと松橋母云かけてまのうと云うり意の心解いて  
かこ心とん他まうり是を考すてむさときやう  
白とけ付事ハ甚卒急の御りあはれは  
天下の家通とも成へまといふ人あはれ故なくして  
ありの香白いすたううた又



行國令れこころ一紀聖子相傳する事原の連歌  
建治の式め初おの面を十句とて之を西に  
作るもをいふは是れめをめて古式を人の名を西に  
許すもと南院子も若くは後とお傳するを真し  
心持むとて一紀聖子も毎度出度集之芳山と曉山  
集ふも大概論して連歌の二式めは新式  
對し古式とて之を一紀聖子の意あは新式より定む  
おるれは古式とて新式とて之を古物とて之を  
是れ新式を傳ひて之を真徳立南宗周等とて  
其れをいふは西に巧也一是れ連歌の古式とて

一向表すすくはと割の例を破りて守りて連歌  
是を名づくは破法の羅科高きものなり一西に  
名をいふは破りてけし難きものなり一彼等は  
の流業計人を知りて已に受ての事と執  
りて一努力天下一統の中人の中へ出て正義の  
妨をいふはも一正法の連歌士も如けの迷惑を  
出度し時を証を唱りて是を責難を打て彼  
たて一是れ道への純忠節義也  
一連歌連歌の意の句は揚也一揚也といふは  
志うも其れ解を知らず一私に自詩を記し他を時ハ

牡丹之歌也との對ハ揚之連歌俳諧の花ハ牡丹  
あは揚中も阿ら次篇突牡丹の廢表の惣意と  
いへ心ハ百韻中ハ中ハ折五中ハその他人  
對して廢表出さぬ故に友人の俳諧等も  
考へて折五中おめて牡丹透選此白阿れハ左の  
宗通も人なるとり附白牡丹附白阿れその作  
物心のみすまもの丹非さる夜一燈互不傳りて多ハ  
うゝ教りてく出まの二十三白目を定座といへる  
貴瓶のむを揚へこ切をせり一燈為く

一 猿蓑集 名跡の花止

揚腹一とハ丹喉上りり

けりを花の盛中へせこ丹ひりり物と花子  
揚をててとるり手進むいりて一とて  
花子礼ひりりする事留りり金く揚正花中阿ら  
但し彼集不地例有ハ凡花中此阿りの仕立丹阿  
あて物折ハぬむ心決ハ切く三ハ盛名跡此折ハ教  
かくの心得何とて一物ハ丹彼集初折丹散ハ花を出さ  
すへる百韻中ハ中ハ折ハ歌仙ハ百韻三分一此白不  
一本丹てハすくり一二本ハ多一ハされ花阿れ定阿道ハ  
定二本と中古ハ定事進り物ハ丹初折丹散ハ花有て

名所のうゝ丹まき花をりーかすり句教めはさる花  
たれい懈遊の傍を立てけ取を構えく漸されしり  
是千歳一時の愛創といふのめて宗道は縁縁を  
きいすりな記を記し一勢と是未此愛創を格と  
尋常の人乃すまき事其水さる

一 深川まき花の白丹や日雲を月丹用ひらるるも是金  
雪園月丹の何れかと云西月雲の月丹て陰骨又ハ  
矣名おも難成不不盡の奇作あり抗を与信忠者  
とちり事ある也

一 翠白の智と云事一 那諧一巻の六事之はお徳を記也

しして句を記るハ端一き語丹尻を踏りぬ系といふ  
しとく一書丹志きりあり何の益丹もさるる愛想両乞  
祈禱をものに致すらるて至(き)事也

一 祝言の祭句に心切の句甚忘事と云七文の續きり  
縁徳本ハ五書連書を用ひらる定ての事一切字は繫  
是又智ひ事と云事句ハ句端丹も一切字用控す  
へ一かあり大方と云

一 愛想の句季り一切字あり一かと云た服丹季切也  
を八層一愛想下の句句た縁丹も句をて一て面を  
九句と一却合百一も事是又事之大概愛想也



八ののちちめて月一ツ又花も一折一本といふ大概序  
後一してうら後りする事なれにけうく月日と花  
二ツありていふ事とりて後りく自由ありけいあり地  
の白あれにもの光をかり用て月日を暗くする事連歌  
に恒式となれと後りうらに花を記す時日月は白有  
へき事白備へ連歌の式を撰字とて中の  
月く連歌止月の白れなきを恒式とて古人も多  
それより後りれり今とても急務のうらに花ありに  
日の白すうらあるありあらぬとも中古以来の各千  
ありひ集のあり花を面白くするともけり花をうらに

一して古哲の仕かへは遠くさるるを此道の二種と  
一揚も花に付うらに花も揚句附くありを分るる  
ありていふ事へ揚も花と附ていふ事白揚も花もあり  
揚もて連歌の花に揚も花ありあらぬ花も揚も  
付てありの花もありと無くありていふ事ありある事  
一連歌の道さるるありていふ事知事ありの切字連歌も  
はこれありていふ事多くありていふ事ありある事あり

山田のうらに月日の事

けりていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

ちものりしれども後をくぬ者の手敵も揃は  
ず、目の腕をも忍れぬ風情なれとさよんへきやうも  
う一是に刊をぬしは切字の自法に山里のハハ  
松のまハ門松は似れらばも平目だ〜とせけ平目の  
下目か〜といふ詞を合せて一白の得び〜一是を略〜  
とるおせし一白切らしき人のたれらおしな切字に物  
止を半にか〜でけ及看て不案内の弊へハ切字と云  
は二筆のるハの、字をたさおたけ西めん一白切らしと  
途方やく〜しな切字言を云教て其人を謝するこ  
お〜一の、字ハを文字のハ神とす金持なく大方をた

はあ〜と成字を能く門と松と二筆のる自切らし相  
もひたりともその間ハの、字を入〜と二筆連続で  
切字とハ成〜は況や門松は百ハの、字を入れて切らし  
掛網を掛の網〜一押能を押の能〜一書約を  
ま書の約〜一切字よりぬの、字ハ五〜は切〜と  
能なる切字なりとも字の書西あ〜てハ上下の繋ぎと  
なる文字の飾なく切字の用をさ〜ハ内類ひ〜と  
さね〜と〜理る〜

一様なる切字なれは詞のつちた止成てハ切字にあらざるを

馬蹄の書や書〜一日の入り



けや文字大概切字に用り字多れ在ゆけの繋ぎ入て  
中の中連やまの字同おれや又字なる取切字と六の  
一や二や三や四などの類是れ同一又向一ハ切字  
されたりなり字多し取切字に様々ぬ例あり

相くりーされたりなり様々の事

高きーとてあり相りる事あり

高きーとてあり相りる事あり

是もハ上も向一して尋常なり其の字と云ふに  
御まはるるなりーされたりなりー文字を御さ  
まま下へ云下ー書きーまはるると又同ー事

續けていづれも切字の用をうひ下へ云續けらに  
よりけりなりなり書きなりなりはるるはるる切  
字なり切字なりなり切字なりなりはるるはるる  
の、字多し一と切一や字多しなりなりはるる

一曉山集之取切字なり

あ月あハ字の取見各の事

けりの中も同なり雨の字又文字なり字多しなり  
字の字多しなり字多しなり字多しなり字多しなり  
七文字も通りー又字多し通りーいづれも通り  
向きの字も解らるる字多し通りー切らるる事

私目付るがくむつりく理成り及び是は心を通す  
切の仕をて一白の心は白日の如き松風の音すを  
ふくく空を空の水をてみくくくはけ松風は下  
ふくく空を空を空の如く入る一白の音は空はくく是を  
略しつら切し空を想して心切の白は空ははくく  
あつ人の白は

「白くみえ返る事」と相抜る

是空を空をかえり時の白くく返る事ありぬと  
云詞のまへをを思へて空は相ぬけ事と遊んで  
白く

「月集」三修切の句は

「花」の細柳の枝をとりて風

注目又文字へ一の物を引上げてあれはかく云ふ  
くは花の細柳の枝をとりて云はくく云はく  
くは下の又文字へ一の物を引上げて云はくく  
時は風の吹きて花の咲柳の葉を解りては感  
不審くくは不審を説くは下は略す 又私目  
けるはかく云ふくく理りて及りは詞をかくく  
一白の心は吹きて花の咲柳の葉を解りては感  
解らんとは花の咲柳の葉を解りては感

字のトキヨリ云か作らるる取切字と云ふ是レ一ト一ト  
解體一注其ノ是レをかく一ト一ト一ト一ト一ト一ト  
一回集ニ取切ヲ似通ひしる白也切也白也

**白** 雨ハ字の也トリト勝の也

**神**の事洗ひて星也云乃川

注ト目自由の白又文字より七文字の心懸一又七文字の  
末のトの字ト付レぬ此の神也星と云五文字と下レ  
五文字ト付レぬ又是ト七文字也末の此ノ字トヨリ一  
クしぬ能く味少一と云ト私曰是もるも其ノ注ト  
ありも白の心を取ハく是先白雨の白ハ

**白** 取ハる也勝の也ト勝の本ト

白ハ白也其の目也其力ハ云及リ此神トも勝臺  
より出らるト一ぬれらと一けり申ト也文字ニ付ル  
申の也申切字ト云ハ星と云又文字より七文字也  
ト一ハ云此神の事也白ハ

**神**の事洗ひて星の天の川

けりを洗ひて星と云一ハ星ト云一ハ星ト云一ハ  
其のト一文字也切字ト云下トの文字を付レるト  
唯初ト云切字ト云此注トのト一文字也一ト一ト  
ハ一ト一ト一ト

一回集大旦一借交の前止

あなたとうと喜の自みくまは借  
是あふふとまは借とあつて切らふとまは借のん  
何はあふふとまは借とあつて切らふとまは借のん  
略してまは借とまは借とあつて切らふとまは借のん  
残る切交えは類い

あらま地の核減乱るまは借

是乱るまは借一書の為を略してまは借

一回集自ら旅葉切の悦白目

非かた非あつて久し松の香

注目悦白なまは借して切交と尺由のあつて他者ハヤりて  
久しと向や一書切つてまは借とあつて切らふとまは借のん  
感情の悦白目一して筆でまは借とあつて切らふとまは借のん  
あつて切らふとまは借の悦白目とあつて切らふとまは借のん  
すまは借の悦白目とあつて切らふとまは借のん  
一回の中まは借あつて感情の心甚深一是類ひか  
をまは借とあつて切らふとまは借のん

一回集自ら旅葉をこめらむ心切の悦白目

松目ハ悦白目秋を秋の香

注目是世の事なれど一と云ふの如く母してそれあり  
あらば母も母えをこめて心切にせよ

〔鹿〕の書とくじしる庭の秋は山

注目自是はあつた母似通ひて心苦しくも亦能く切  
くじしるは世の事なれど一と云ふの如く母してそれあり

私云右二句の注実を解いたは大方は姑の句は母  
後の句は世一とされ二句とも切事の由母にめて面

母解はさぬ句は之れ為人の爲注に略せり考て知し  
一 形借新式母習の切事と云事あり

〔却〕てたりいふの申すは禱の聲

けり白二句の母切事と云事あり一是詞をかき  
くち切事といぬの中なるは去母申すは禱の聲  
いぬは下知

一 和歌は新式下知の詞といふは大概急げせてぬ  
へぬれよと云ふの類もく下母の字を添へやする  
をいふことと云ふ風もけりぬれぬと云ふ類は  
非語の早語俗語を採り多しものなるもけりけり  
弁は振くの詞ありて下知となる事と云事解は  
をこをとのかおより等と云詞は拙を賞す  
をこは新式を添へて新式と云事あり我は飛ホ

「初も踏ま可敷口なれば教之際限り一皆是詞を云  
諸く世絶一切字となりされは初連歌也此去  
ありて用ひら一諸語あり是亦且限らば一  
初も踏ま可敷口なれば教之際限り一皆是詞を云  
諸く世絶一切字となりされは初連歌也此去  
ありて用ひら一諸語あり是亦且限らば一  
初も踏ま可敷口なれば教之際限り一皆是詞を云  
諸く世絶一切字となりされは初連歌也此去  
ありて用ひら一諸語あり是亦且限らば一

なまてはありを仕事三に諸しぬ事一も創  
てははあれ地もなれおをすり事一

一花の自分三をハる一す曲の園よりハの園をハ  
遠くより一とハ貴院麻衣并れあうれハ曲の園を  
延び一ハ初より一とハの接るれは是ハ時の  
宜一もハ初より一とハ

一花の自分三をハる一す曲の園よりハの園をハ  
遠くより一とハ貴院麻衣并れあうれハ曲の園を  
延び一ハ初より一とハの接るれは是ハ時の  
宜一もハ初より一とハ

字の毎字仕まゝく濁るゝの儘と云ふは、猶白  
ふて是又一編の各自之次第連続の心をもて  
有りてをてゑりとの相いらんとす。是れ  
と云ふは、先人の格好や、字の字の毎字を  
字一句の自其格好成りたるや、止まると  
さらの度例にをまて、是は反上り返るの  
は、まゝといふ所、あれは古人の式も、  
事ごとく、此の事、款部、格好、  
係り、とも、是を母の、高、  
も、人、老人の、年、の人、な、れ、  
毎、交、人、

者、式、も、造、ひ、  
一、度、の、真、も、  
急、の、  
味、  
宗、  
先、  
こ、  
と、  
是、  
海、

廿八切字を入れて時の季を越せ入るる此間答  
出りやうもは立駈ハ文字毎月二ハてと然  
かゝのこく心づて欠徳立甫の定らぬ  
襖式をもつてはきつ居一冊なすて天下  
後世に傳るるも何れ非ざる者もあれハ  
あや一巻の自尔某異なる白紙りハこと人  
を半之とも勢くま起半月河く良是氏  
道北肝要と扱之

書林

京寺町二条上町

井筒屋庄兵衛

板

大坂高麗橋筋壹丁目

吹田屋多四郎

清是くたるおく之陣探し  
かゝる一書をと挿く挿るる  
故人善向徳主房あ所記の  
傳初子似通ひきりおび  
威一高松をく是也此書  
那諸塔を組るる良材也



成るものちと自類千流に  
削つゝか多しの書持止るぬれ  
櫻尔い連栲にすり母に際了  
述り贅具良昔申先歳冬秋  
浪善深暮、塙正月堂遠之

三州換名  
太田傳長



衣藩 太田羽持

